

# ひとむれ

二〇一〇年十二月号

## 収穫感謝祭

校長 加藤正男

朝の太陽を浴び、もやが立ち込み朝霜が牧草畑を覆っています。

生徒たちが本館に登校してくる時、息を大きく吐きながら、真っ白にして登ってきます。

雪は一〇月に少し降ったのですが、一月は遠軽町でも白滝の地区を除いて、留岡地区は、現在のところ、積雪はありません。年によつては年末にもあまり雪のない年もあると言われています。このひとむれが届くときには葉を落とした「から松」に雪がたわわにつもっているかもしれませぬ。長い冬がはじまっています。

作業班活動発表会が一月二一日から二三日の三日間行われました。

収穫感謝の日に行われるこの行事は、古く戦前から新嘗祭という祝日に合わせ収穫感謝の礼拝がなされてきました。

よく食べ、よく働き、よく眠るとい健康

的な生活習慣を獲得することが基本と言う家庭学校の留岡幸助先生の場合は、大正四年六月の「感化教育における三能主義」という文に書かれています。

「吾人が多年実験し、きたりたる感化教育は、少年をして能く働かしめるとともに、能く食わせ、能く眠らしめるにありき。この三要件はつとに少年を教育するに必要なのみなら

ず、すべての人類を教育するにおいても、また、誠に必要欠くべからずものなり。・・・家屋を建築するにはまず礎を据えざるべからず。その如く人の子を教育するにおいても、また、礎なかるべからず。そもそも、礎とは吾人のすでに述べたる勤労、飲食、睡眠の三時なりき。吾人はこれを称して感化教育の三能主義となす。この三事を実行すると同時に、教育をもつて智囊を磨き、宗教をもつて心性

を開発せば・・・感化の実行を奏し得ざるものなり。」

毎年、ひとむれは、収穫感謝祭特集号を作成していました。

ここ三年間は、作業班学習は続けられていましたが、特集号としてまとめることはできませんでしたが、今年三年分をまとめて、つ

なぐことができました。

一九五三年の収穫感謝祭特集号から当時の生活を見てみると、生徒数は八〇名を超えており、八か寮の寮長・寮母、一一班の作業編成で、一日の課業時間の四五パーセントを作業の時間にかけています。山林部・土木部・果樹部・園芸部・蔬菜部・軍手部・精米部・木工部・酪農部・養鶏部です。それぞれの部

が活動しています。

戦後に校長となつた留岡清男先生は、戦争ですべてが破たんとなり、経済的な支援を頂いていた多くの企業が打撃を受けたため、三男の幸男氏とともに企業を回り寄付を頂いてきました。校内に記念林が多数名づけられています。山口林、千代美林、星谷林・鮫島林等の方々は戦後の苦境な時代、家庭学校を支

えて下さった方々です。

教育は胃袋からのスローガンのもと、それぞれの作業部の経済的自立と、自給経済により生活基盤の確立を目指しました。毎年の総括をこの収穫感謝祭における作業班発表会においてなされてきました。

働くことが生きることの基本であり、働く

事の意味を学ぶことが教育の基本であり、働く習慣を身につけさせることが教育の本質との理解をもつて教育実践にあたってきました。

新しい生徒がここの生活に慣れるのは時間がかかります。今月入所した中学二年生の生徒は、入校して本館で寮長と一緒に寮に戻りましたが、そのうち本館の学習の場にも行く

ことができません。食事も最初はほとんど食べず、閉じこもり状態になりました。児童相談所での生活においても一カ月職員とも話のできない状態が続いたとのことであり、普通の生活に至るまで時間がかかります。

八か月前入校したT君に、学校の相談員として関わってくれた網走市の教育相談員の先生が十一月十九日にここにきて、授業風景を

見ていただき本人とも話を交わしていました。とても考えられないぐらいいい方向に変わっていったことに驚かれました。寮での生活・学習場面での生活・作業面とまだまだ、人とぶつかったり、集中できない面は残っています。何とかここの生活になじんでいます。

家庭学校の生活で安定した居場所を確立し

ていくことは、寮長・寮母を始め家庭学校職員・分校の先生方からの毎日の地道な働きかけの結果とわたしたちは考えています。

ここでの生活で前向きで積極的な生活を過ごした生徒の予後はいいのです。しかし、ここでの生活で失敗を繰り返し、生活になじまなかつた生徒もすべてが悪い方向に行くということは言えません。

家庭学校では作業面・生活面とがんばっており、その後就職した職場でも信用をえていたY君が、油断なのか、職場先から二輪の免許取得時に、車の窃盗事件を起こし少年院に入所しました。彼の荷物は、寮長が引き取りに行き家庭学校で預かっています。反省の手紙がきます。

みんなの信用を裏切ってしまった、申し訳ありません。必ず社会復帰したら、家庭学校にあいさつにきたいと、少年院の面接室で固い表情ながら、言葉少なく寮長と私に対して語ってくれました。

退所して、かなりたった生徒から、来年から札幌の大学に合格したとの電話が寮長に入ります。いい知らせには本当に私たちを元氣

づけてくれます。

大地の詩 留岡幸助物語の映画のロケが岡山でも行われました。そこに留岡幸助先生の奥さんである夏子さんの姉さんの一族にあたる人が留岡幸助先生の子どもたち九人の記念写真を届けられました。明治四一年九月の記念写真です。清男先生は一〇歳の小学生の姿

です。

「この度の映画化については、本当にうれしくて、陰ながら声援を送っています。長い年月が終わってこのように留岡幸助氏の偉業と夏子の献身を取り上げていただき映画にまでして頂けるというのは本当に夢のようです。夏子の姉つるが私の曾々祖父に嫁いだものですから、実家では曾祖父、祖父、父へと幸助

氏の偉業が語り継がれ、幼少のころよりずっと聞いて育ってきました。父が三〇年間保護司を続けてきたのも幸助氏の志にうたれていたことも大きかったと思います。・・・父が存命中に同志のかたと一緒に呼び掛けて岡山県高梁市福祉会館の庭に顕彰碑が建立されましたがこれまで注目する人もほとんどありませんでした。今、機が熟しこうして準備が来たものを感じます。一人でも多くのかたに映

画を見て頂いて、家族の愛の大切さを再認識し複雑になりすぎた現在が原点に戻ることを願ってやみません・・・」長い手紙にその思いがあふれていました。

今年の収穫祭学習発表会も盛大に催されました。

昨年から分校が導入されましたので、総合

学習の中に作業班学習が位置づけられました。が、実質的な作業内容は引き継がれています。しかし三〇年前と比較しますと大幅に作業内容は変化しています。現在は、蔬菜部、校内管理部、山林部、酪農部、園芸部の五つの班に分かれています。発表会においては、それぞれの生徒全員から音楽室に準備された発表会場でみんなの前で作業内容や学習研究した事項を発表します。

書かれた模造紙は七〇枚近くになります。

時間をかけて準備した発表が三日にかけて行われしました。最終日は礼拝堂にて、食事に関する栄養士さんからの発表と私の講評です。

そしてその日の夕食のメニューはすき焼きです。ここでの生活で汗と膏を投じてつかんだ

さまざまなかみしめていつてほしいの  
です。

生徒たちは、入校したころ、なんでもめんどくさい、かつたるい、やる気がしないと後ろ向きの言葉と行動が、ある時なくなりま  
す。みんなで生活を作り上げていくからです。  
生徒たちの成長が作業の場面で目に見える形  
で見えてきます。四二五ヘクターの森の農

場の教育力を大事に引き継いでいきます。き  
びしい自然に学び生徒とともに学ぶ流汗悟道  
の精神を大切にし、家庭学校の営みを続けて  
いきます。

## ケータイ考

伊藤 浩士

校長先生の住宅の近くに菩提樹の木があります。この実を食しに訪問するのはエゾモモンガです。菩提樹の実は、ヘリコプターのようには旋回して散らばるようになっていきます。少年たちは、実を拾っては空に向かって投げて、旋回する実の自然の遺産を楽しんでいます。

す。

家庭学校には来客者、見学者や実習、研修でお見えになる方が非常に多いです。昨年度から公教育導入を始めたことにより、更にその数は増えたように思います。

寮担当者は、終日少年たちと接しているため多くの取材を受けます。家庭学校の歴史についての質問から始まって、少年の入校理由の傾向、一緒に暮らしている少年たちへの思

い等を質問されることが多いです。最近は、大学関係者の方が学術的な資料にするための質問が増えています。質問が専門的で多岐に渡っているため、すらすらとお答え出来ない私は眉間にしわを寄せてばかりいます。

自分自身で及第点の回答だと思いが、子を持つ親の視点からの回答です。中三の長男を筆頭に、中一の長女、小一の次男の子を持つ親としての感覚は、考えて物事を申し上げ

るのではなくストレートに発言をすることが出来ます。例えば「少年たちの高校進学で悩むことは？」と尋ねられた場合は「自分の進路のことであるのに他人事であることが挙げられ、私や分校の先生に任せてしまいます。進路のことで考えたり悩んだりしません。それは、周囲に見本となるべき親の存在がなかったことも影響しているし、高校なんて入学出来ればいいか…というその家の文化もあり

ます。私の長男は、ごく普通の両親のいる家庭で育ち両親に躰をされて育ちました。小学校にも中学校にも通いました。長男の友人も同じように育っているから、自然と高校進学へとなるのでしよう。しかし、家庭学校の少年と同じところがあって競争社会で育っていないため進路について悩まないですね。」と返答出来ません。そこで「だから夫婦小舎制が必要なのではようか？」と質問されると微笑

してしまおう。「赤ちゃんと言われる姿で生まれて来た時点では、どの子も一緒であると言えます。しかし、母乳で育てるのか、人工乳で育てるのかということから始まる食のことや、肌触りのよい布団や動きやすい洋服を着ているのかという衣のことや、整理整頓されて空調が行き届いているのか、という住のことなど衣食住だけでも差が生じてきます。スタートは同じでも、親が子育てをする能力は

確実に退化していると思います。自分のこどもを育てられないのです。私たち夫婦は決して優れた親ではないのですが、こどもたちのためであるのならばいろいろな我慢が出来ます。親というものは、こんなにも躰にうるさいし、こどもを監視しているし、愛情を与えている存在であることを少年たちに教えています。今は、うるさいと思われてもいつか自分は家庭学校で大事にされたのだと思つて欲しいで

す。」と返答出来ます。

なぜ親の子育てをする力が弱くなっているのでしょうか。まずこどもの生命力の強さに対応出来ていません。そして子育てをするのは行政ではありません。こどもが泣いてうるさい、反抗をするというのは生命力の強さの何ものでもありません。それを大人の腕力で抑えてしまう虐待は目を覆う出来事です。

先日、出張先の札幌駅で見たポスターが印

象に残っています。「つかまる、という安心」という文字が記されたものでした。なるほどと思いましたが。エスカレーターに子どもを乗せる際には、ベルトにつかまらせてください、親につかまらせなさいという至極当たり前のことを子を持つ親に喚起しているのでした。それはまた、電車の乗降の際にも親は子どもから目を離さないことと訴えているようにも思えました。事実、私はこどもとエスカレー

ターに乗る際には片方の手をつながせて、もう片方をベルトにつかまらせませます。または、不測の事態に対応出来るように、こどもより一段低い所に身を置きます。

私が提唱したいことは「こどもは親の手の届く所に置く」ということです。危ないと思つたら手をつなぐ、悪いことをしたら頭を小突く、または撫でるといふ親の体温を感じる距離に、こどもを置いて守らなければなりません

ん。

携帯電話はケータイと記されることで意味が通じる世の中です。携帯電話を持つことにより、こどもの活動範囲は広がりました。携帯電話を持つことで楽になったのは、こどもではなく親です。行動範囲が広くなってもいつでも連絡が取れます。

夕食の時刻に遅れても、帰宅時間が遅くな

つても安否の確認が出来るようになりました。帰宅を待つ親は、事故に遭ったのではないかと要らぬ心配ばかりします。分が悪そうに帰宅したこどもに対して母親は料理が覚めてしまった愚痴をこぼします。こどもの肩がすくみます。きょうだい待ちくたびれてお腹が空いたよ、と文句を言います。うるさいな、謝っているだろうと開き直ります。何だその言い種は、と父親が怒ります。こどもは悪い

と思うのです。

携帯電話では、どうでしょうか。家族の声  
が耳に届くでしょうか。

私が百貨店で買い物をしていたら、長男と  
長女に呼び出されたことがあります。「伊藤  
浩士様、お子様がお待ちです。」という呼び  
出しに赤面しました。自分がこどもから目を  
離したことを後悔しました。逆にこどもを呼  
び出したことがあります。それもこどもか

ら目を離したからであり親として恥ずかしく  
思いました。

私がこどもの頃は電話を借りるという意識が  
ありました。電話の加入権を買っていた時代  
です。学級の緊急連絡網には自宅に電話がな  
いため「呼び出し」と書かれた子が何人か  
いたものです。外出先で電話を借りる際には、  
公衆電話と同じように十円玉を一枚置いてき  
なさいと親に言われたものです。

街に通学している私のこどもから、スクールバスに乗り遅れたと連絡が入ります。食堂や書道教室から連絡をさせて頂いた場合には、翌日に十円玉を握らせてお礼を言つて来るように教えています。長電話をしていれば注意をします。また、夜九時を過ぎてからの電話は「遅い時間に申し訳ありません。」と言いなさいと教えています。どうしても電話で謝らなければならぬ場合には「お電話で申し

訳ありません。」とも教ええました。相手が受話器を置いてから、自分の受話器を置きなさいとも教えています。

次男と布団を並べて休んでいます。未だに眠りながら足で蹴って親の所在を確認します。本能つてすごいな、だけどそんなに蹴らなくてもここにいるよと独りごちます。少年たちによく言うことで「私はいつでも家庭学校にいる。変わらずにここにいます。」と

いうことがあります。いつでも近くにいること、その場所にいること、手の届く距離にいることの安心感をこれからも与えていきたいと思っっています。

齊藤先生が規則正しく植えたパンジーの花壇に、菩提樹の実が旋回して落ちていきます。本格的な冬が近付いています。(終わり)

図一) 在籍四五人の中から無作為に三〇人

を抽出

【図表などはPDF版では表示できません。  
ご了承ください。】